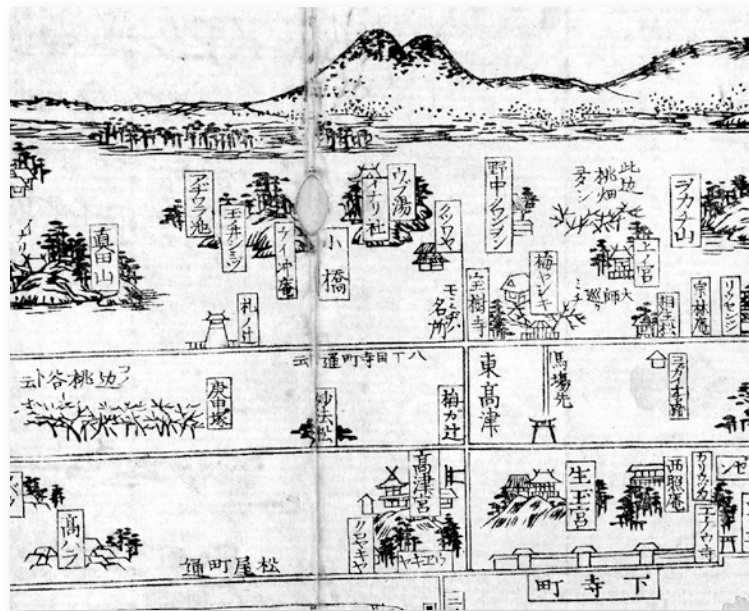


おおさか  
KEY  
ワード  
第55回

春の風流は上町台地から

梅花、桜花、そして幻の“桃花”



幕末の地図「浪華名所獨案内」(部分)では、生國魂神社の馬場先に「梅屋敷」があり、その東に「野中観音」、その南に「桃畑多し」とある。また画面左の真田山に「コノ辺桃谷ト云」(部分 個人蔵)

春になると人々は花を求め、オペラ『椿姫』のARIA「花から花へ」のように花の名所に足を運ぶ。二月三月は、西日本最大規模といわれる大阪城の梅林がすばらしい。大坂の陣でも活躍した片桐且元にちなむ「市正曲輪」にあるのだが、昭和49(1974)年、大阪府立北野高校開校100周年事業の一環で寄贈された880本の梅をもとに開園した新しい梅林で、現在は1.7haに97品種、1240本の梅が植えられている。

大阪には江戸時代にも梅の名所があり、文化初(1804)年のころ生國魂神社(天王寺区)の馬場先に、江戸・亀戸を模した大坂版の「梅屋敷」が開業している。安政二年刊の『浪華の賑ひ』に「園中に数株の梅を植えつらね樹下に席を設く。さる程に如月の花の頃には清香四方に薫じて道行く人も唯に過ぐるを得ず。もとより風流の好士等むれ集ひて遊観す」とあり風雅な名所だった。秋には菊でも有名だったという。大阪城の梅林が終わると、つぎは土佐稲荷や造幣局の通り抜けをはじめとする桜花が待ちかまえている。

しかし本来は、梅と桜の間の三月中旬には七十二候の「桃始笑(ももはじめてさく)」で知られる桃がある。かつての大坂は桃花の名所でもあった。一養斎芳瀧(1841~1899)が「浪花百景」に描いた「野中観音桃華盛り」(表紙)を見ると、薄桃色の花を咲かした桃の木に、寒さで羽毛を膨らませた二羽のふくら雀が舞い飛び、はるか向こうまで一面の桃林がつづいている。

野中観音は、浪華三十三所観音めぐりの第十三番の札所で、近鉄上本町六丁目駅付近の東高津(天王寺区)にあったらしい。『浪華の賑ひ』では、「玉造小橋

の辺より天王寺までの間すべて一円の桃畑なれば、この野中といへる地はまつたく桃の最中にて、紅み匂ふ花の盛りには天も酔へる光景なり。されば物いはぬ花の下を人は口を休むることなくおもひおもひに諷ひつれつつ樽や瓢や花の枝うちかたげたる楽しみは、彼の桃源の仙境はいざしらず、その一時の榮花にて千歳も延ぶる心地なるべし」と記す。

上六周辺の上町台地には桃にちなんだ名称が多い。明治20(1887)年開院の市立桃山病院(大阪市立総合医療センターに統合)や、JR桃谷駅も明治28(1895)年に大阪鉄道の駅として開設されたときは桃山駅だった。市立中央小学校(中央区瓦屋町)は四つの小学校の統合で生まれたが、うち二つが桃園小学校、桃谷小学校である(他の二校は金甌、東平小学校)。あたり一带かつて桃林が広がっていたイメージが浮かんでくる。

中国の「西遊記」で孫悟空が食べた不老長寿の仙桃が実っていたのが、仙女の西王母の所有する蟠桃園で、蟠桃は扁平な形をした桃だが、江戸期大坂を代表する町人学者・山片蟠桃(1748~1821)が号にした。また、陶淵明の『桃花源記』から「桃源郷」という言葉が生まれ、与謝蕪村など大坂ゆかりの日本の文人画家たちも好んで描いている。

「夜桃林を出てあかつき嗟峨の桜人」という蕪村の句は京都の情景だが、「浪花百景」のような風雅な世界はないだろうと知りつつ、ぼやきながら、それを大阪に置きかえて桃林をイメージして春の散歩にでるのもまたよいかも知れない。